

主 題：罪と向き合う 4

聖書箇所：ローマ人への手紙 6章7-11節

主イエス・キリストが「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」(ヨハネ3:3)とニコデモに語られたとき、主は救いのことを話されたのです。人が救われるためには新しく生まれ変わらなければならないのです。新しく生まれ変わった人、それは真に救われた者であると私たちはパウロを通してこれまで学んで来ました。ローマ人への手紙6章を学んでいますが、真に救われた者、本当のクリスチャンは新しく生まれ変わった者であるということを見て来ました。

☆真のキリスト者とは？

A. 罪に対して死んだ者 2節

B. イエス・キリストと結び合わされた者 3-5節

C. 生まれ変わった者 6-10節

1. 死んだ者(古い人の死) 6-7節

6節でその人は「すでに死んだ者である」と言いました。パウロはこのように言いました。「**私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられた…**」、「**私たちの古い人が死んだ**」と。罪の赦しを得ていない人です。アダムにある人、救われていない人のことであると私たちは見て来ました。それは生まれながらの自我が死んだということでもあります。私たちが生まれながらにもっていた自我ゆえに、私たちは利己的であり続けました。神に従うよりも自分の思い通りに生きて来ました。神のみこころよりも自分の考え、計画を優先して生きて来ました。神から託された人生、また時間なのに、自分のためだけに用いることしか考えずに生きて来ました。このことをすれば神が喜んでくださるかどうかも、このことによって自分の欲を満たすことが出来るか、自分が満足出来るか、自分が喜ぶかという、そのことだけを考えて私たちは選択をして来たのです。そのような生き方をしてきた自分が、また、そのような生き方を生み出して来た自我が死んだのだと、パウロは教えてくれたのです。それゆえに、私たちは自分のからだを、また、自分のすべてを正しく主のために用いることが出来る者へと生まれ変わったのです。そのことを私たちは前回、この6節から学んだのです。

皆さん、救われるということは非常に素晴らしいことです。というのは、これまで罪を犯すこと、神に逆らい続けることしか出来なかった者が、神に従って神を喜ばせることが出来る者へと変えられたのですから。イエスを信じたあなたは神を喜ばせることが出来るのです。そういう人に生まれ変わったのです。だから、救われたのです。神のみこころに逆らい続ける者が、神のみこころに従うことが出来る者へと変わったのです。また、神の栄光を汚すことしか出来なかった者が、栄光を現わすことが出来る者へと生まれ変わったのです。だから、救いは素晴らしいのです。神が私たちにこのような者へと変えてくださった。そして、このような人に生まれ変わるためには、かつての古い人は死ななければならないのです。かつてのままでは神を喜ばせることは出来ません。私たちは死ぬ必要があったのです。

7節を見てください。パウロは生まれ変わった者への祝福を教えています。7節でその祝福をこのように述べています。「**死んでしまった者は、罪から解放されているのです。**」、「**罪から解放されている**」と。確かに、パウロはこれまでイエス・キリストの恵みによって救われた者は、その罪の束縛から自由にされた、罪の力から解放されたということを教えています。でも、私たちが今見たいのはここで使われている「**解放**」ということばです。皆さんの新改訳聖書の欄外には「**放免されて**」という別訳があります。実は、この「**解放されて**」ということばは「**使徒の働き**」13章に出て来ます。そこではこのように使われています。13:39「**モーセの律法によっては解放されることのできなかつたすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。**」、パウロはここで「**モーセの律法を守ることによってあなたは解放されることがなかった。でも、イエスを信じることによって、あなたがたは例外なく解放される**」と言います。そうすると、確かに、私たちが今見て来たように、確かに、罪の束縛から解放されて自由にされると言えるのですが、もう少し見て行くとこのことばにはこのような意味があります。それは「**正しいと宣言される、罪がない、潔白であると宣言される**」ということです。確かに、これもパウロが私たちに教えてくれたことです。裁判の場であって裁判官が被告である私たちにに対して、「この人は聖い、正しい」と宣告してくださる、それが救いであるということはもう私たちはパウロから教えられました。実は、パウロはそのことをこの6:7で言わんとしているのです。

生まれ変わった人に与えられているその祝福とは何か？神から正しいと宣告されている、神はどのようにあなたのことを見てくださっているということです。私たちはその罪の力から解放されて神を喜ばせることができる者へと生まれ変わりました。同時に、神は私を正しいと宣言して下さっているのです。皆さん、救われたということは素晴らしいことだと思いませんか？神は私たちが本来造られた目的

に沿って生きて行くことが出来る者へと生まれ変わらせてくださった。そして、今、私たちは正しい、聖い神の前に立つことが赦された正しい者なのです。このような祝福を神は一方的にイエスを信じる者たちに与えてくださっているのです。しかも、この信じるという信仰までも神は私たち一人ひとりに与えてくださったのです。けれども、そのような特権、祝福をいただいた私たち信仰者ですが、現実を見ると悲しいことがたくさんあります。私たちはそのような祝福をいただいているながら、罪との戦いを経験しています。また、罪に対して私たちは敗北を繰り返すことを経験しています。神はそのこともご存じです。イエス・キリストを信じて罪赦され、神があなたを正しいと宣言してくださった、それでもなお、あなたに罪があるということを神はご存じなのです。

ですから、弟子たちがイエス・キリストにヨハネの弟子と同じように祈りを教えてほしいと問いかけたときに、イエスが教えられた祈り、一般的には「主の祈り」と言われていますが、その中でこのように言われました。「**私たちの負いめをお赦しください。…**」と。覚えておられますか？これは罪の赦しを求めているのです。「負いめ」とは「借金、負債」です。言語学者のA・T ロバートソンはこのことばは「神に対する道徳的、また、靈的な負いめである」と説明しています。ですから、人に対するのではなく、神に対して私たちは負いめがあるということです。道徳的に靈的に私たちは負債を負っていると言うのです。つまり、イエスが言いたかったことは、イエス・キリストを信じている者たちも悲しいことに、日々罪を犯すから、その罪の赦しを求めなさいということです。主ご自身も私たちがいかに罪深い弱者であるかをご存じなのです。また、ヤコブはヤコブの手紙3：2で「**私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。**」と言いました。「**私たちもみな**」と言っている以上例外はありません。みな、救われた私たちみなです。クリスチャンであっても、私たちは悲しいことに「**多くの点で失敗をする**」と言うのです。多くの点で失敗する、道徳的に正しいことをしない、神の前に間違っただけのことをすると。しかも、「**失敗をする**」という時制は現在形です。継続してそのように行ない続けて行くと言うのです。救われていながら、神によって正しいと宣言されているながら、現実には、私たちは罪を犯すのです。

なぜ、このようなことが私たちの内に起こるのでしょう？それは、私たちがまだ罪のからだをもっていているからです。聖書の中には「からだ、肉」と記されていますが、それは罪によって虐げられ罪によって用いられるものです。ですから誘惑されるのです。このことに関して、ロイド・ジョーンズ博士はおもしろいことを言っています。「二つのフィールド、広場のことです。二つの高い壁によって囲まれているフィールドがあると想像する。すべての人はサタンと罪によって支配されている方のフィールドで人生をスタートさせる。だれも自分自身ではそのフィールドの壁をよじ登り、そこから逃れることはできない。しかし、神が神の恵みにより御手を伸ばし、サタンの支配されているそのフィールドから私たちをキリスト、また、義によって支配されている別のフィールドへと移してくださった。私たちの境遇に決定的な変化がもたらされた。私たちは罪との全く新しい環境に入れられた。しかしながら、私たちにはかつて住んでいたフィールドから壁越しに呼びかけているサタンの声が聞こえる。長年に渡る習慣から、私たちはまだ時々彼の声に従ってしまう。従う必要がないにも関わらず。」と。私たちの葛藤を見事に言い表わしています。

私たちが覚えておきたいことは、私たちイエス・キリストを信じて救われたクリスチャンのうちに二つの性質は存在していないということです。新しい性質と古い性質、前回見たように、これは神学なことばですが、新しい人と古い人が私たちのうちに共存してはいません。私たちは生まれながらに古い人によって支配されていましたが、イエス・キリストを信じることによって私たちは生まれ変わりました。私たちのうちには新しい人が住んでいるのです。人は二種類に分けることができます。もうすでに見たように、ローマ5：17でパウロはアダムにある人とキリストにある人の二種類あることを教えました。「**もしひとりの人の違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。**」、パウロは人はキリストのうちにあるかそれともアダムのうちにあるかのどちらかだと言っているのです。アダムのうちにある人はアダムが罪によって死を全人類にもたらしたから、罪のうちにある。けれども、キリストにある人はイエス・キリストが信じるすべての人にいのちを与えたため、キリストのいのちをいただいた者だと言います。でも、どちらの人にも共通していることは「罪を犯す」ということです。では、二種類の人と同じなのでしょうか？明らかに異なる点があります。確かに、罪を犯すという点から見ると、アダムのうちにいる人もキリストのうちにいる人も同じです。でも、違うところは、新しく生まれ変わった人はこれまでのように罪の奴隷として生き続けて行かないということです。なぜなら、彼らはそこから解放された人たちだからです。

神学者のウィリアム・ヘンドリックソンはこのように言います。「罪を犯すことと、継続して罪の中を歩み続け、罪を楽しんでいるのとは大きく異なる。」と。残念ながら、私たちはみなクリスチャンであっても信仰年数がどんなに長くても罪に敗北することが多くあります。でも、かつてアダムにあったときの

自分と、キリストにある自分とを比較したときにそこに違いがあるのです。かつては罪の中を喜んで歩んでいました。ところが、イエス・キリストを信じたことによって、これまでと同じようには生きられなくなったのです。罪が苦しいのです。罪の中であって楽しくないのです。ヘンドリクソンは続けてこう言います。「神の主権的恵みによって新生、回心した者は、もはや罪を喜びとせずにかえって罪と戦う者である。」と。そのようなことが私たちのうちに起こりました。イエスを信じてから私たちは何とかこの罪から離れようとし、人に対してこのような悪い思いをもたないでおこう、人に対してこのような怒りをもってはいけない、人を自分と同じように愛そう、これは神の前に正しくないことだから止めよう、そのような葛藤を私たちは経験するのです。これまでのように罪を喜び楽しんでた自分とは違うのです。私たちは救い出された罪に戻ろうとしないのです。再び、罪の奴隷に戻るなど望まないのです。なぜでしょう？救われたからです。

イエスはこの救いに関して非常に興味深いことを話しておられます。すでに何度か見た箇所ですが、もう一度ごいっしょに見ましょう。ヨハネの福音書8章にイエスの話を聞いてイエス・キリストを信じたユダヤ人たちに対してイエスがこのように話されている箇所があります。31-34節「そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。：32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」：33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたは どうして、『あなたがたは自由になる。』と言われるのですか。」：34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。」、彼らは信じたと言っているけれど、自分たちが罪の奴隷であったことが分かっていません。だから、イエス・キリストがその奴隷の状態から解放してくれると聞いても、何のことを言われているのかが全然分からないのです。34節に「罪を行なっている者はみな」とありますが、この「行っている」という動詞は現在形です。救われていない人の特徴です。継続してこれまでと同じように罪の中を歩み続けていると言うのです。しかも、この「信じた」と言っている人々に対して44節でこのように言われています。「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。」、あなたがたは救われていないとイエスは言われたのです。「あなたたちの父は神ではない、あなたたちの父は悪魔だ」と、非常に厳しいことを言われました。でも、私たちが見逃してはならないことは、主の関心は私たちが何を言うかではなく、私たちの心です。このユダヤ人たちはイエスの話を聞いてイエスを信じました。でも、彼らは自分たちが罪の奴隷であったことが分かっていませんでした。ですから、彼らは罪から救われる必要性を覚えていないのです。だから、彼らはこれまでと同じ生き方を継続しており、それに対して何とも思っていないのです。イエスが言われたことは、救われたならその生き方が変わるということです。救われた人は罪の奴隷から解放されたのだから生き方が変わるはずだと。だから、これまでと同じように罪の中を平気で歩み続けている者は、たとえ「信じた」と言ったとしても、主は「あなたは悪魔の子だ。」と言われるのです。

ローマ人への手紙に戻って、6：1「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」、人々はこのように言います。「私たちが罪を犯すことによって神の栄光が現わされる機会になるのなら、もっと罪を犯せばいいのではないか」と。それに対して2節「絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」とパウロは言いました。すでに私たちが学んだことですが思い出してください。聖書翻訳家のJ・Bフィリップスの訳を紹介しました。「すでに罪に対して死んだ者たちが、どうして少しの間でも罪の中を生きることができるのだろうか？」と。また、「どうして少しでも長く罪の中を生きる気になどなれるでしょうか？」という違った訳もあります。救われた者がどうして「少しくらいならいいのではないか」などと思えるかと言うのです。神によって生まれ変わった者は、その罪の中に浸り続けることに対して拒否を覚えるのです。その中に浸かっていたくない、そのような歩みをしたくないと。もちろん、そこで私たちは様々な選択をするのです。私たちはその中で間違っただけの選択をすることも経験しています。でも、少なくとも、イエス・キリストを信じた人々、神が救ってくれた人々はこの罪への対応が変わるのです。なぜでしょう？その人は生まれ変わっているからです。でも、決して罪の誘惑を受けなくなったとか、罪を犯すことがなくなったと教えているのではありません。もし、イエスを信じて救われた人は罪を犯さない人と言うなら、私たちはみな救われていません。違いますか！また罪の誘惑を受けなくなりましたというのも違います。残念ながら、私たちは罪の誘惑を日々経験します。では、何がどうなったのでしょうか？これまでと同じように主なる神に逆らい、主を悲しませ、主の怒りを買うような生き方を平気で継続することはできなくなったと言うのです。そこが違うのです。

ですから、パウロが私たちに教えていることは、罪を犯すことからの解放ではなくて、罪の力からの解放だったのです。このローマ書6：22でも教えるように「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」。私たちは私たちに支配し完全に束

縛っていたその罪の力から解放されたのです。救われたことの感謝は、私たちはこの神の栄光を現わすために自分のすべてを神に委ねて生きて行くことが出来ることです。ヨハネはIヨハネ3：6、9でこのように言っています。「**6 だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちを歩みません。罪のうちを歩む者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。… 9 だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。**」、神が内在しておられるから、信仰者はこれまでと同じ生き方は出来ないと言っています。ローマ書6章でパウロが救われた私たちに対して言っていることは「救われた人よ、生まれ変わった本当のクリスチャンよ、本当の自分らしく生きなさい」です。これが彼が私たちに命じることです。8－10節を今から見て行きますが、11節から14節でもパウロは私たちがどのように生きていくべきなのかを教えてください。

パウロは、私たちは「新しく生まれ変わった者」だと言いました。そして、まず、それは「死んだ者」であると教えました。

2. 生きた者 8－10節

そして、生まれ変わった人は「生きた者」であると、そのことを8節から教えています。新しく生まれ変わった人には「新しい生き方」が始まったのです。それはどのような生き方でしょう？

1) 天国民にふさわしい生き方 8節

6：8「**もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。**」。救われたクリスチャンたちは「天国民」であるから、天国民にふさわしく生きて行きなさいと言います。8節に「**キリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる**」とあります。私たちはキリストとともに永遠を生きるのです。この「生きる」ということばは5節でも見たように未来形です。将来に必ず起こることであり、同時に、確信を教えます。「私は必ずイエスとともに永遠を過ごすのだ。」というクリスチャンがもっている確信です。そこで私たちが考えなければいけないことは、私は天国というその神がくださったすばらしい永遠の希望をもって、そのことを喜びながら今を生活しているかどうかということです。皆さんは「私は死んでも生きるのです。私は神とともに永遠を過ごすのです。私の住まいは天に設けられているのです。」と、そのことを喜びながら今を生活しておられますか？少なくとも、その事実を私たちがしっかり覚えるなら、私たちの毎日の生活はもっと喜びに溢れませんか？私たちは永遠をしっかりと待望しながら今日を生きることが出来ると思いませんか？残念ながら、そのような真理ではなくて、私たちは周りのものばかりを見てしまって希望を失っていませんか？クリスチャンというのは、天に住まいを設けた者として、永遠をしっかりと見ながら今日を生活している人々です。だから、信仰者としていろいろな問題に遭遇しても、私たちはその中にあって主に喜んで従い続けようとするのです。

覚えていますか？イエスはこのように言われました。マタイ5：11「**わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。**」、いろいろな問題が起こるからクリスチャンとして生きて行くことは段々大変になって行くと言うのです。今の私たちの社会を見てもそのように思いませんか？神の前で正しいことがこの世の中においては正しくないと言われます。この間、アメリカで行われた美女のコンテストで、ある州の代表になった一人の女性が、彼女はクリスチャンですが、このような質問を受けました。「結婚についてあなたは思うか？」と、彼女が答えたことは「私は結婚というのは男女が為すものだと思う」でした。それによって彼女はあの州のコンテストの女王の地位を追われたのです。昨日のニュースで彼女ははっきり言いました。「あの場所で結婚についてあなたは思うかと聞かれたので、私は信じていることを話した。」と。その結果、女王の地位を奪われてしまったのです。結婚は男女間のものであることを聖書ははっきり教えています。でも、それを公の場で口にすることで彼女は女王の座から追われてしまったのです。これは今の世の中であって普通のことです。ですから、どの国にあっても、私たちが神の前に正しいと信じて行っても、この世の中はそのようには見ないのです。

そうすると、私たちは信仰者として失望することがたくさんあります。だから、イエスは言われました。「もし、わたしのためにそのような目に会うのなら、あなたたちは幸いです。」と。なぜでしょう？マタイ5：12「**喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからだ。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。**」、心配しなくていい、あなたがたがわたしの前に来たときに、わたしはこの世の基準ではない神の基準によってあなたに報いを与えるからと言われるのです。少なくとも、そのことを知っているクリスチャンたちはその日を待望しながら、神が為さる公正なさばきをしっかりと覚えながら、今日正しく生きて行こうとしませんか？そのように生きて行くはずです。そして、私たちの先輩はどのように生きたのです。なぜなら、彼らはこの地上のことだけを見ていたのではなくその先を見たからです。私たちに必要なことは、天国に行ってから天国民として生きるのではないのです。天国民ゆえに、今、天国民として生きることです。

2) 死に勝利した者にふさわしい生き方 9節

9節「**キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。**」、パウロが言うことは、死はもうイエス・キリストを支配することが出来ない、なぜなら、イエスはその死に対して復活をもって勝利されたからと。イエス・キリストの復活は死に対する勝利宣言だからです。この「**支配する**」ということば、これは確かに「**支配する、統治権を振るう**」という意味がありますが、同時に、主人と奴隷の関係を表わすのです。何度も私たちが学んでいるように、奴隷はしもべとして主人に従わなければいけません。しかし、イエス・キリストがその死から復活することによって、かつての主人であった「死」はその力、統治権を失ったのです。もう主人ではなくなったのです。だから、パウロが言った勝利の宣言を思い出しませんか？ I コリント 15 : 55 「**死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。**」、イエス・キリストは死に打ち勝たれたのです。そして、イエス・キリストを信じる私たちも同じように死に対して勝利した者なのです。私たちは「**死んでも生きる**」のです。ペテロもこのように言いました。「**使徒の働き**」 2 : 24 「**しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。**」と。死は必ず私たちに一歩一歩近づいて来ます。この地上にあって私たちはその死を経験するかもしれません。でも、それで終わらないのです。死に勝利した者として私たちは主とともに永遠を過ごすのです。私たちはみな生まれながらに永遠のさばき、永遠ののろいを受けるにふさわしい者でした。そのような生き方をしていました。しかし、神が私たちをそのようなところから解放してくれたのです。だから、先ほど読んだ箇所の後、57節には「**しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。**」とあります。イエス・キリストがその死からよみがえって勝利を得たように、私たちもその勝利を得た、でも、それは私が何かをしたからではない、その勝利は神が私にくださった、だから、神に感謝するということです。

そこで皆さんに考えていただきたいことは、あなたは死に勝利した者として、そのことに感謝しながら生きていますか？ということ。毎日の生活でからだは衰えて行きます。嘆こうと思うならいくらでも嘆くことができます。しかし、私たちにはその事実だけではないのです。その背後にあるもっとすばらしい事実をしっかりと見ているのです。「私は昨日よりも今日一歩主にお会いするその日に近づいた」と、クリスチャンは自分の人生に関しても、永遠に関してもまったく違う見方をする者となったのです。私たちが救われたということはこの死に対して勝利したことです、死で終わらないのです。死んだ後、永遠の滅びにも行かないのです。私たちは死んだ後、栄光のからだをいただいてこの主とともに永遠を過ごすのです。その希望をもって生きておられますか？そのことを感謝しながら生きていますか？私たちの周りには死に対する恐れを抱いている人たちが溢れています。死についてなど話したくないと言う人で溢れています。でも、私たちはそのように言う人たちに語るべきメッセージがあるのです。イエス・キリストによって生まれ変わる、イエス・キリストによってあなたには永遠のいのちが与えられるというこのメッセージをあなたは語っておられますか？

3) 罪に勝利した者にふさわしい生き方 10節

「新しい生き方」に関してパウロは、それは「天国民としてふさわしく生きること」、「死に勝利した者としてふさわしく生きること」であると教えました。そして、三つ目に「**罪に勝利した者にふさわしく生きること**」であると10節で教えます。「**なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。**」。この前半でパウロはイエスの死に関して二つの大切な教えを述べています。

(1) 罪人の身代わり

一つは、このイエスの死は罪人の身代わりであったということ。イエスの死と私たちの死とは違うことを教えています。ここに出て来る「**罪に対して死なれた**」ということばは6 : 2にも出て来ました。「**罪に対して死んだ私たちが、**」と、これと同じことばが使われています。これはクリスチャンがもっている典型的な特徴を表わすとすでに学んで来ました。つまり、クリスチャンはすべての人間がそうであるように生まれながらに罪の中を歩んでいた者でしたが、その生き方に対して「もう止める」と言って罪に対して死ぬ決心をしたのです。だから、「救われた」と言うのですが、2節で「**罪に対して死んだ私たちが、**」とパウロが言っているのは、私たちは死に対して死ぬ必要があること、罪から救われる必要があることを明らかにするためです。私たちは自分が罪を犯して来たゆえに、その罪を清算しなければいけなかったのです。ところが、イエスは10節で「**キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、**」と同じことばが使われていても、イエスには私たちと同じように清算しなければならない罪はないのです。イエスのうちには全く何の罪もなかったからです。では、何のことを言っているのでしょうか？イエスは自分の罪のために死ぬ必要があったのではない、自分の罪を清算する必要があったのではありません。イエスは私たち人間の罪の清算をする必要を覚えてそのことを為さったのです。だから、イエス・キリストはあなたの罪の身代わりだったと言っているのです。II コリント 5 : 21 でパウロが言っ

ている通りです。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。」

(2) 罪人の贖い

しかも、このイエスの死は「罪人の身代わり」ただただではありません。「罪人の贖い」のためだったのです。罪人を救うため、あなたを救うためだったのです。しかも、その為された救いが完全であったゆえに、「ただ一度」ということばが加えられているのです。もし、完全でなければ何回も死ななければなりません。その当時為されていた動物のいけにえと同じです。へブル人への手紙7：27には「ほかの大祭司たちとは違い、キリストには、まず自分の罪のために、その次に、民の罪のために毎日いけにえをささげる必要はありません。というのは、キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。」と記されている通りです。また、同じく9：12にも「また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」とあります。「やぎと子牛との血」とはその当時の人々がささげていたいけにえです。この動物のいけにえによってでは人間の罪は完全には赦されませんでした。しかし、「ご自分の血」、イエス・キリストの血によって、その犠牲によって永遠の贖いを成し遂げたのです。完全に救いが備えられたのです。動物のようにイエスは何度も十字架にかかる必要はありませんでした。「ただ一度」で良かったのです。一度で救いを完成されたのです。ですから、イエス・キリストの死は私たちの死とは違うのです。その説明をパウロはここに加えているのです。

パウロが言っていること、それは、イエスは死なれた、また同時に、イエスは生きておられるということです。イエスの「生」のことを10節の後半で教えています。「キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。」、キリストは「神に対して生きておられる」と。イエスの生涯を見るなら、まさにそのような一生でした。地上におられたとき、イエスはこの神のために生きられました。神との完全な正しい交わりを楽しみとし、また、栄光のために生きて来られました。そのことをもってパウロは私たちに言うのです。「あなたはイエスとともに死んだ者であり、あなたはイエスとともに生きた者である。」と。11節「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」、それなら、イエスが歩まれたように私たち信仰者も「罪に対して死んだ者」、そして、「神に対しては…生きた者」として生きるべき、そのように生きなさいと言うのです。どうですか？皆さんは今見て来たように、神によって罪赦された者としてそのことを主に感謝しながら歩んでおられますか？あなたは喜んで主のためにすべてをささげて生きておられますか？大げさに聞こえるかもしれませんが、いのちがけで主に仕えておられますか？実は、私たちの先輩たちはそのように生きたのです。彼らはいのちがけで主に仕えました。いのちがけで主に従って行きました。

彼らはなぜそのように生きたのでしょうか？彼らの証を聞いてください。ダニエルの友人だった三人の兄弟たち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴですが、あるとき、バビロンの王ネブカデネザルは金の像を造って、音楽が聞こえたらみなそれを拝まなければいけない、拝まなければ殺すという命令を出しました。彼ら三人がその命令に逆らっていると分かって、彼らは捕らえられネブカデネザル王の前に連れて来られます。そこで彼らは王に対してこのように言います。ダニエル書3：16-18「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。：17 もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。：18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」、注意して見ていただきたいのは、彼らは「私の神」と言わず「私たちの仕える神」と言ったところです。彼らは唯一まことの神に仕えていたのです。そして、ご存じのように、彼らは炉の中に投げ込まれました。ネブカデネザル王はその様子を見ていました。24-25節「そのとき、ネブカデネザル王は驚き、急いで立ち上がり、その顧問たちに尋ねて言った。「私たちは三人の者を縛って火の中に投げ込んだのではなかったか。」彼らは王に答えて言った。「王さま。そのとおりでございます。：25 すると王は言った。「だが、私には、火の中をなわを解かれて歩いている四人の者が見える。しかも彼らは何の害も受けていない。第四の者の姿は神々の子のようだ。」、彼らは着物も髪の毛も焦げていなかった。その出来事に遭遇したネブカデネザル王はこのように言います。28節「ネブカデネザルは言った。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。」、皆さん、バビロンの王がこのような証言をしたのです。「この三人は自分のからだを捨てても自分のいのちを捨てても、神に従い続けようとした。この三人は神を信頼し、そして、この神に仕え続けた。」とネブカデネザル王が告白するのです。その生きざまを見たからです。彼らはいのちがけで主に仕えていると。

パウロもそうでした。カイザリヤでのこと、そこにアガポという預言者がやって来ます。そして、パウロがこれからエルサレムに上るが、彼には大変なことが待っていると預言しました。周りの人々はパ

ウロにエルサレムに行けば危険が待っているのだから行かないようにと願うのです。そのときに、パウロはこのように答えています。使徒21：13「するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしていますのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。」と答えた。」「主イエスの御名のためなら」、つまり、イエスのためなら私は喜んで死にますと言うのです。

皆さん、今のこの時代にあって、このような信仰者はどこに行ってしまったのでしょうか？彼らの信仰が私たちに教えていることは何でしょう？彼らは神を愛していたのです。彼らは神の成された犠牲をしっかり理解していたのです。そのことが分かっているゆえに、この神のために私はいったい何をしたらいいのだろう、この神のみわざに私はどのように報いて行くのだろう？とそのことを考えて、いのちをかけて私を愛してくれた神のために、自分も喜んでいのちを捨ててこの方に従って行こうと決心をしたのです。これは自然なことではないですか？トーマス・シュレイマーという、サザンバプテスト神学校の教授がこのように言います。「もし、従順が彼らの生活の特徴でなければ、彼らは未来の救いを得ることは絶対はない。」と。つまり、本当に救われている人の特徴は「神に対する従順」だと言うのです。

悲しいことですが、私たちの従順は不完全です。でも、少なくとも私たち生まれ変わった者は「神さまはこれほどまでに私を愛してくれて、私のためにこんなに大きな犠牲を払ってくれた。では、私はこの方に何をもって報いるのか？」ということに当然考えるはずです。そして、考えるだけではなく、そのように生きようとしている人たちです。もしかすると、この中の何人かの皆さんは、かつてそのようなことを思っていたかもしれません。しかし、信仰生活の経過とともにそのような思いが段々薄れてしまって「まあいいか、救われたのだから、罪の赦しをいただいたのだから、これでいいか。」となっていないませんか？クリスチャンの皆さん！目を覚まさないといけません。私たち一人ひとりがしっかりと覚えなければいけないことは、こんなに大きな恵みをいただいた私たちには責任が生じているということです。主に対してどのように生きるかという責任です。だから、パウロは繰り返して、こんなに素晴らしい祝福がクリスチャンに与えられた、では、あなたはどうかどう生きるのか？ということについていつもチャレンジするのです。

信仰の立派な勇者たち、彼らは心から神を愛していたのです。それは口で何かを言うことではありません。その生き方がそのことを証したのです。神から一方的に与えられたこの救いの恵みを彼らは理解していたゆえに、この偉大な神のために私は何をすべきか、この神が喜ばれることをして行きたい、この神が望まれることをして行きたい、この神の栄光のために生きて行きたいと考えて行動したのです。では、いったい私たちに何が起こったのでしょうか？なぜ、私たちはそのように考えないのでしょうか？なぜ、そのように生きないのでしょうか？その答えは、あなたが出さなければいけません。パウロは私たちに教えてくれました。これ程の恵みを神は与えてくれた、それゆえに、私はこのように生きて行く、今、話したように、いのちがけで主に従い続けると。そのパウロが私たちにチャレンジするのです。あなたはどのように生きていますか？罪を容認していませんか？罪に負けていませんか？と、パウロはあなたに、救われた者としてその主の恵みに感謝する者にふさわしく生きて行きなさいと語るのです。

あなたはどのようにお答えになりますか？救われた者として、主の恵みに感謝する者にふさわしく生きて行く、そのように生きたいものです。そのように生きてこの人生のレースを終わりたいものです。あなたはいかがですか？主の前に悔いのない人生を生きることです。その人生は、みなさん、明日から始まるわけではありません、今から始まるのです。あなたの決心によって。